江戸時代のワクチン接種

太宰府の文華
～公文書館だより㊾～

宮浦（福岡市西区）で荒物屋を営んでいた津上悦五郎が遺した、江戸時代末から明治にかけての記録『見聞略記』、文久2（1862）年の項には次の記事があります（高田重廣校注『見聞略記　幕末筑前浦商人の記録』）。

当冬、所々痘瘡（天然痘）流行いたし、兼て植痘瘡致し居り候わば、殊の外手軽く、近村も飛び飛び流行いたし申し候えども、植痘瘡の故にや広がり申さず候

「植痘瘡」とは種痘（天然痘ワクチンの接種）のことで、この年の冬に天然痘の流行が見られたが、種痘のおかげか蔓延しなかったと伝えています。この記述から、当時すでに浦の一商人が種痘という医療法を認識し、その作用を感じていたことが分かります。

当時、福岡藩では黒田長溥の治世下（1834年家督相続）、領内で種痘の普及が目指されました。種痘といえばその祖とされる秋月藩医・緒方春朔（1748―1810）が浮かびますが、国内で主流となっていくのは彼が用いた人痘法（患者から採取した瘡蓋を砕いて鼻孔に付着させる）ではなく西洋由来の技術である牛痘法の方で、福岡藩でも西洋技術の導入に熱心だった藩主・長溥が登用した医師・武谷祐之（1820―1894）により牛痘の接種が広められました。

太宰府では、在村医・中川昌沢が安政3（1856）年に太宰府天満宮社家中の「種痘之医」を担当することを藩に許可されました（『太宰府市史　通史編Ⅱ』）。中川家は代々太宰府で医師を務める家系で、昌沢は福岡藩の内科医や京都の古方派医に医術を学んだ後、太宰府に戻り村の「掛医」として診療を行っていました（『太宰府人物志』）。当時種痘は、地域の医療を最前線で担っていた医師たちによっても徐々に進められ、巷でもその効果を実感されるに至っていた、ということが窺えるのではないでしょうか。

太宰府市公文書館　藤田理子